

# 日本電子音楽協会第四回定期演奏会

1995年11月21日(火)

開場 6:00 p.m

開演 6:30 p.m

ドイツ文化会館OAGホール

田村 文生： 獣道にはいつも、光の差し込む坂がある

Bass Clarinet： 谷口玄德

岡崎 光治： 緋昏(hikon) - 電子音とピアノのための

演奏： 石垣弘子

西岡 龍彦： 夢のかたち - 独奏フルートと電子音響のために

Flute： 中川昌三

Peter Gahn： haikyo yori (招待作品)

水野みか子： digIvox

Voice： 畠中恵子(Sop.)

鶴田 睦夫： SONG OF THE SPIRITS

語り： 古屋 和子

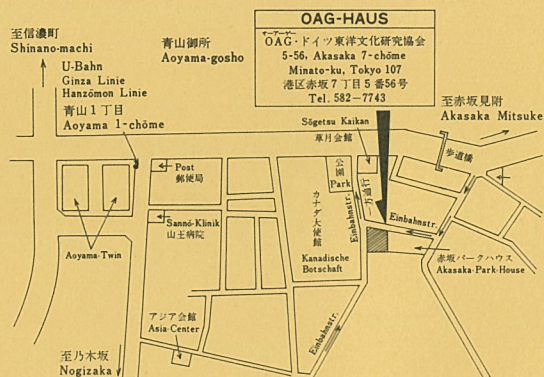
ハーカッション： 永田砂知子

鶴田 睦夫

入場料 3,000円(全席自由席)

お問い合わせ：チケットセゾン TEL. 03-5990-9990

日本電子音楽協会 TEL. 03-5997-5018





日本電子音楽協会

## 第四回定期演奏会

1995年11月21日（火）

ドイツ文化会館OAGホール

主催：日本電子音楽協会



## プログラム

<b>田村 文生</b> ：	獣道にはいつも、光の差し込む坂がある	Bass Clarinet：谷口玄徳	
<b>岡崎 光治</b> ：	緋昏(hikon) - 電子音とピアノのための	演奏：石垣弘子	
<b>西岡 龍彦</b> ：	夢のかたち - 独奏フルートと電子音響のために	Flute：中川昌巳	
	休憩		
<b>Peter Gahn</b> ：	廃虚より（招待作品） - 制作・協力：I C E M	CDによる演奏	
<b>水野みか子</b> ：	digIvox	Voice：畠中恵子(Sop.)	
<b>鶴田 睦夫</b> ：	SONG OF THE SPIRITS - 「子別れ」異聞	台本：鶴田 睦夫 語り：古屋 和子 パーカッション：永田砂知子 鶴田 睦夫	

### 獣道にはいつも、光の差し込む坂がある

たいていの人々にとって、音に対するイメージを物に対するイメージから切り離すのは容易なことではないでしょう。例えばテレビの野球中継を音を消して見ている時、打者のバットがボールを芯でとらえた瞬間、私達は「カン」という濁いた音を想像します。またTVドラマの拳銃発砲シーンの「ダン」という音は、その音が聞こえる以前、すなわち画面のどこかに拳銃を発見した時から既に必然的なものとして予想されます。しかし「カン」も「ダン」も、想像される音の多くが本物の音と掛け離れており、音は音響効果の一素材として扱われているため、それを最終的に決定するのは聴く人々の経験的常識でしかありません。

また、普段コンサート・ホールで聴く音楽が、純粹にアコースティックなものであれば音は奏者の立っている位置から耳まで直接届きますが、ともすると知らないうちに補助的に音が増幅されている場合があります。これは会場の条件や音楽の必要性により施されているのですが、聴衆は知らず知らずのうちに自然な音響として受け入れています。この場合、音と耳との間に空間（空気）だけではなく、電氣的メディアが存在しており、その使用方法によっては音楽そのものを変え得るだけの可能性があるのではないのでしょうか。

この作品では、クラリネットというアコースティックな楽器の音に電子音を加えることにより、今見ている物と今聴いている音との流動的な関係を再構築することを目的としています。演奏者はバス・クラリネット一人ですが、電子音響がそれに加わることによって、楽器という「物」から電子音の加わった「音」全体がどう聴取されるか、また、視覚的には独奏であってもそこから聞こえる音がおよそ独奏曲の音色的概念からかけ離れているとき、楽器と音楽の関係、または器楽編成とそれを聴く聴衆の奇妙な関係が音楽構成の重点です。 （田村文生）

##### 田村文生

東京芸術大学作曲科大学院修了。ヴァレンティノ・ブッキ国際コンクール入賞、第10回〈東京の夏〉音楽祭にて、モスクワ現代音楽アンサンブルによって室内オーケストラ曲が初演、「饗応夫人」が1994年度の全日本吹奏楽コンクール課題曲となるなど、様々な活動を行っている。来年1月にはピアニスト近藤伸子氏のリサイタルにおいて委嘱作品が演奏される予定である。

本年9月より文化庁芸術家海外研修員として渡英、Guildhall音学院（ロンドン）に在学中。

##### 谷口玄徳

東京芸術大学大学院修了。クラリネットを海鋒正毅、三島勝輔、村井祐児の各氏に、室内楽を海鋒正毅、中川良平の両氏に師事。大学在学中から、数多くの現代作曲家の作品を初演する。

昨年6月のリサイタルでは、古典から現代作品までのクラリネットを含んだ編成を披露。クラリネットのための幅広いレパートリー拡充のために精力的に演奏活動を行っている。

現在、東京クラリネットフィルハーモニー団員。また、同世代の奏者と共にヴェルウト四重奏団を結成。来月12月1日に第1回演奏会を葛飾シンフォニーヒルズにおいて開催予定。

### 緋昏

ライブのピアノ音と、音源（TG77）に内臓されているピアノ音との絡みを中心にした曲。音源に内臓されている方のピアノ音には様々な加工が行われ、また、ライブのピアノの音も部分的な変調がなされている。 （岡崎光治）

##### 岡崎光治

1935年、旧満州国朝陽生まれ。東北大学工学部入学後、教育学部に転入、1958年同学部音楽専攻科卒。現在、宮城教育大学、尚綱女学院短期大学などの非常勤講師。作曲活動以外にも様々なコンサートの指揮、企画などに携わっている。

日本電子音楽協会理事、宮城県芸術協会理事、日本作曲家協議会会員、J F C東北会員。仙台電子音楽協会代表。
主要作品：オペラ「鳴砂」、混声合唱組曲「古都千体村哀慕」、電子音による「碑の音」I～IX、オーケストラのための「緋曲」。混声合唱とピアノ・打楽器のための「いろはうた」、電子音のための「打の彩」I～III、「六分儀」など。

##### 石垣弘子

武蔵野音楽大学教育学部ピアノ科卒。今井紀子、中根伸也の各氏に師事。

「仙台音楽祭サミットコンサート」、「アジア音楽祭 '92 in 仙台」、「東北の作曲家 '94 in いわきコンサート」、「アジア作曲家フォーラム '95 仙台」、「'94、'95 宮城県 芸術家協会音楽会」、「日本電子音楽協会第1、3回定演」、「いわき市立美術館コンサート」などのほか、仙台市内の大学及び一般合唱団の演奏会に、客演ピアニスト・シンセサイザー奏者として数多く出演している。

### 夢のかたち

昨年、独奏フルートとウインド・オーケストラのための曲を書いたが、その時のフルートには、増幅用のマイクと、演奏された音をMIDI信号に変換するためのマイクが取り付けてあった。変換されたMIDI信号は、音色やピッチの設定された7台のシンセサイザーのノート情報となり、あらかじめ録音されたテープに併せて演奏された。

その曲のフルート独奏をお願いした中川昌巳さんのすばらしい演奏を聴いて、ウインド・オーケストラを除いた、フルートの音色がもっと繊細に活かされるような独奏曲を書きたいと思った。

今回も演奏を快諾された中川さんに心からお礼申し上げたい。 （西岡龍彦）

##### 西岡龍彦

東京芸術大学大学院修了。現在、桐朋学園大学、洗足学園大学、東京芸術大学各講師。

1980年 第49回日本音楽コンクール第2位

1983年 第11回ブルジュ国際電子音楽コンクール入選

1988年 I S C M－A C L 国際現代音楽祭入選



## 中川昌巳

1947年、東京神田に生まれる。東京芸術大学付属音楽高校及び同大学卒。現在、東京芸術大学フルート科講師。フルートを林リリ子、小泉剛、野口龍、ジャン・ピエール・ランバル、アンドラーシュ・アドリアンの各氏に、ジャズ理論を渡辺貞夫、佐藤允彦の各氏に師事。「中川昌巳／現代フルートの領域」（カマー・トキョ）、「ポエジー」（ピクサ-JVC）を初め、数多くのCDをリリースしている。日本で初めて共通曲目を含むクラシック編とジャズ編、2枚のCD「クロス・ウインド／デジタル・バード&イン・ア・センチメンタル・ムード」も発表している。クラシック、現代音楽では「昌巳」、ジャズ、ポピュラーのような即興音楽では「昌三」とジャンルにより名前を使い分けている。フルート音楽の様々な面を開拓し、確立し続けているパイオニアである。

### 廃虚より

この作品はドイツ、エッセン市フォルクヴァング大学のICEM（コンピュータ音楽・電子メディア研究所）において制作された。作品はいくつかの断片により、全体が有機的に構成されている。冒頭の15秒ですべての音素材が提示される、それに続く約3分間で、素材どうしの可能な結合がすべて生成される。それ以降は、移高、フィルター、残響など、様々に処理された素材が、それぞれに関連を持ちながら、単に繰り返されるのみである。すべての素材は、低中高の様々な音域で、異なった速度で繰り返され、非常に短いものからかなり長い反復までである。これらの繰り返しは、ほとんどの場合大変規則的に行われるが、次第にカオス状態にまで到達する。音色とリズムはアナログ・モジュール・シンセサイザーで作成された後、残響装置とフィルターを用いてデジタル合成している。（Peter Gahn／日本電子音楽協会・訳）

#### Peter Gahn

1970年、ミュンスターに生まれる。8才よりクララ・シューマン音楽学校にてピアノ、作曲などを学ぶ。1991年よりフォルクヴァング大学にて、ニコラウス・A・フーバー教授に作曲を、ディルク・ライス教授に電子音楽を学ぶ。クルツィストフ・マイヤー、ヴァルター・ツィマーマン等にも師事している。1993年よりチュータとしてICEM（Institut für Computermusik und Elektronische Medien der Folkwanghochschule）にて、実際のスタジオ・ワークに関する教育（アナログ合成、ソフトウェア・シンセシス、C++によるソフトウェア作成）に従事している。1995年夏、秋吉台の国際現代音楽祭に招待され、来日する。現在、フォルクス大学講師。コンピュータ・コンポジションを担当している。

### diglvox

人声に関してこの上なく適格な洞察力と判断力を持っているソプラノ歌手、島中恵子さんの協力を得て、声色、ピッチと声質の相互関係、時間軸上での響きの変化など、声のさまざまな可能性について考えることができた。電子的に加工された声と生の声、その両者がどこまで深く絡み合って、新しい響きの磁場を作り出すことができるか。その〈絡み〉の様態には、物理的なサウンドだけでなく、言葉や旋律の持つ〈意味世界〉も強く作用しているようだ。（水野みか子）

#### 水野みか子

東京大学卒業。愛知県立芸術大学大学院作曲専攻修了。神奈川県創作合唱曲コンクール、日仏現代作曲コンクール、日本交響楽振興財団作曲賞などに入賞・入選。作曲のほかに、音楽学としての“music theory”や、音楽評論、レクチャー・コンサート企画・構成なども手がける。作品と論文は Bourges の国際電子響音楽フェスティバル（仏）や DE IJSBREKER（壙）など、海外でも紹介されている。

## 島中恵子

東京芸術大学大学院修了。1985年モーツァルト音楽コンクールで第三位・前田賞を受賞。大学院在学中の1989年〈Music Since 1899〉にてブーレーズ《主なき槌》を歌いデビュー。1992年出光音楽賞に選出。古典を含む幅広いレパートリーを持ち、91、93、94、95年と現代作品によるリサイタルのほか、NHK-FMおよびテレビにも出演。サントリー音楽財団〈サマーフェスティヴァル1995〉ではベリオの《セクエンツァIII》を歌い、特に高い評価を受けた。

### SONG OF THE SPIRITS

おめえさん方、なんで、そうあくせくお稼かせぎになるんです。そんなに銭ぜにが欲しいんですかい。それでいってえ何を買いなさるんで。え？ おとなりと同じもんが家いにもねえとくやくってしょうがねえですって？ おやめなせえ、おやめなせえ。そんなもの要いる時に、ちよっくら行って「御免なせえよ」って借りてくりゃいいんで。おとなりさんいも、もってえぶらねえで、どうか喜んでお貸かしなすっておくんなせえまし。あたしゃ、女房かかろだってお貸かししますぜ。そんなに何でもかんでも俺わのもの俺わのものと、てめえで独ひり占めなさんいこった。あたしなんざ人様ひとに貸かせねえのは、手ぬぐいに、ふんどしに、浴衣ゆいぐれえなもんいでさあ。手ぬぐいがねえと湯ゆに入るいのにこまっちゃう。ふんどしがなけりゃあどうもしまいらなくっていけねえ。浴衣ゆいがねえと風邪かぜをひいっちゃう。でもね、こんなもんでもよかったら、いつでも持ってちゃっっておくんなせえ。

ところでね、この世の中には、決かまっちゃうてることなんざ、これっぽっちもありゃしねえんですぜ。決められっこねえものを決かまっちゃうてるもんだと信じちまってて、それをあたりめえだと思い込いじまうのは、あっしら人様の脳かミソの常じょう套たうというもんでさあ。そうそう、たとえば、この世の中には男おとこと女めがいて、おめえは女、俺わは男おとこなんて分けちまってるが、ほんとにそう思いますかい。え？ あたりめえじゃねえかって？ でもね、おめえさん方よーく考えておくんなせえ。あっしら男おとこの胸むねには何なにがありますかい？ ご婦人方にはずいぶんとご立派たてなのが真まわっていらっしゃるが、男おとこ衆しゆうにも小こっこいのがふたつ、チョン、チョンとくっついていやしょう？ ていうことは、あっしら男おとこもその昔むかしは女めだったってこっですよ。男おとこなんざ、女めのなりそこないみてえなもんでしてね。まー、とどのつまりこの世の中には、女めしかいねえってことになりはしませんかい？ ほらみなせえ、男おとことか女めとかなんにも決かまっちゃいねえでしょうが。え？ もっとその先まの話わが聞ききてえですって？ ようがす、これからあっしがおめえさん方に、とくと語かたってきかせやしょう。（熊五郎・談）

**鶴田睦夫**
1956年、鹿児島県生まれ。東京芸術大学大学院修了。作曲を藤島昌壽、吉崎清富、北村昭、南弘明、黛敏郎の各氏に師事。1980年、第49回日本音楽コンクール入選。
主要作品：2台のマリンバのための「Mi-Do」、4台のタンブリンのための「タンブリン・サミット」、ヴァイオリンとタンブリンのための「バルカン・エチュード」、打楽器アンサンブルのための「Music! Music!!」（クラウンレコード）
”M・D”(CRCJ-9106)収録)、2つのリコーダのための「チャイナ・タウン」（ALMレコード ”YASU”(ALCD-7017)収録)。

### 古屋和子

早稲田小劇場（現S C O T）、横浜ポートシアターを経て現在ひとり語らりで活躍中。近松、鏡花からM・ユルスナールまで多彩なレパートリーを手がけ、いまや彼女ならではの語りの世界を確立している。近年、北米各地の先住民居留地を訪ね、先住民の口承を聴く旅を続けている。

### 永田砂知子

子供の頃よりクラシック音楽を学び、東京芸大打楽器科を卒業。オーケストラなどで活躍するが、その後、民族音楽を学びアフリカやトルコ、アラビアの音楽を演奏する。その後、ベースの吉沢元治氏との共演をきっかけに、即興演奏の分野でも活動。吉沢元治氏／巻上公一氏等とセッションする。美術家、ダンサーとのコラボレーションも多い。